

**負債とは何か、負債（と貨幣）の起源は？ 市場はなぜ常に負債を必要とし、しかもそれが常に隠蔽されているのはなぜか。**

2018年3月5日に日本でレビュー済み

本書では、「負債」とは何か、その歴史的起源はどのようなものであったかが論じられる。人間はなぜ「負債」を負うのか——つまり、なぜ他者に対して義務を約束し、その義務は果たさなければならないものとみなされるのか、これが本書のテーマである。

人間が社会の一員として手助けし合う形態には、「コミュニズム」「交換」「ヒエラルキー」の三パターンがある。負債とは、これらのうちの交換とヒエラルキーの(ヘーゲル的に言えば弁証法的矛盾の)統一体である。特に報酬を求めることなく行われる相互の関係(コミュニズム)に対し、「交換」は両者の合意の上、得るものと与えるものとが等しくなる（但し、それが数字で明示されるとは限らない）という意味で、当事者の「対等」な関係を前提とする。他方で「ヒエラルキー」とは支配するものとされるもの、収奪するものとされるものとの関係であり、「対等」とは真逆の関係である。「負債」は対等といううわべに収奪・支配という関係を包摂する。対等であるがゆえに交換という形式をとるのだが、それはヒエラルキーを結果する。イヌイットは言葉の謝礼すら拒絶するという。なぜ

なら謝礼の言葉を述べることは負うものと負われるものの関係を創りだし、それは「奴隷関係」を生み出すからだ。実際、ひとたび「負債」を負わされた人間は、その歴史的・社会的関係から切り離され、「対等」な関係にある、と見なされる。実際にはその負債は暴力や植民地支配、虚言により創りだされたものであることも少なくない——それこそ歴史を大きく動かしてきた——のだが、ひとたび負債という形をとってしまえば、それは対等な関係の一方が他方に対して負わなければならない義務という形態で表象される。支配者が自分の暴力的支配を正当化する手段こそ「負債」概念なのである。

本書では A.スミスが繰り返し言及される。論点は二つである。負債のない交換というのは当時のイギリスではそれほど普及していなかった。つまりイギリスでは多くの取引は未だターリー・スティックやトークンによって、つまり個人の発行する負債によって行われていた。それにも関わらず、スミスが負債を発生させない取引として市場の交換を描いたことの意図とは何だったのか。そしてもう一つは、スミスの膨大な著述の中からはなぜただ二つのことだけ——商品貨幣の生成理論と「自己の利益のための交換」——だけが、今日に至るまで経済学者はもとより、多くの人々の観念に浸透しており再生産されるのか、である。

スミスの貨幣生成理論（商品貨幣理論）の誤謬は、M.A.イネスをはじめ数多く

指摘され、人類学者や歴史学者によって証明されている。誤謬であることがこれほど明々白々なのに、なぜ人の心をとらえ、再生産され続けているのだろうか。スミスの著作の中にみられるおびただしい議論の数々、労働価値説や停滞論、共感の概念などがすべて誤りとして（あるいは重要性がないとして）捨て去られた後にも何故かこの二つの命題だけは常に繰り返されている、という意味で特別な重要性を持つ。そして人類学者たちはなぜそれに代わる神話を創りだせない(あるいは創ったかもしれないが普及しない)のか。（著者は何もスミスの貨幣論の誤謬を指摘することを目的としているわけではない。そんなことはもうとっくにやりつくされているのだ。問題は、それにもかかわらずなぜ、今日に至るまでスミスの議論が繰り返されているのか、だ。）

著者は返す刀で、スミス流の商品貨幣論の対立項となっているネオ・カルタリズム(チャータリズム) (MMT) およびレギュレーション/コンバンション派の信用貨幣論も批判する。著者は一旦は MMT の「租税貨幣論」をテクニカルな意味で受け入れる。貨幣が流通するのは国民が租税債務を受け入れるからだ。この点は、貨幣の素材が紙切れであろうと貴金属であろうと、変わらない。(著者は歴史を「金属貨幣」と「信用貨幣」の入れ替わりとして記述しているが、この意味では基本的にネオ・カルタリズム的な信用貨幣論のスタンスに立っているといえ

る。)

だがそこから一步進めてなぜ国家には課税の権利があるのか、を問い始めると途端に議論は朦朧とし始める。ジェフリー・インガムによる「実存的負債」の概念は空疎である。いったいメソポタミアの帝国やモンゴルの支配地域の人々はなぜ帝国による課税を受け入れたのか。「実存的負債」概念では説明ができない。

「実存的負債」概念によって国家の徴税権を正当化できるのはフランス革命以降の国家概念とそれと対になるコント流の(デカルト——われ思う、ゆえにわれあり——といったほうがよかった気がするのだが) 自分自身を自分以外の世界と分断して表象することができる人格概念を前提とする場合だけである。歴史上、あるいは人類学的に観察される多くの社会ではまったく当てはまらない。その意味では、MMT やコンバンシオン派流の信用貨幣論はスミスの商品貨幣論と同根なのであり、両者は「コインの両面」に過ぎない。

この指摘は、MMT 批判のために引用されているのがマイケル・ハドソンの著作(本書は M.ハドソンに大きな影響を受けているが、同時にハドソン自身は MMТ のもっとも強力な支持者の一人であり共同研究もいくつかある) からであるという事実によって、より印象付けられる。

結局のところ、貨幣その他「負債」を基礎づける神話の内容は空疎である。貨

幣の起源に人間関係、国家や徴税を含むヒエラルキー関係、奴隷制、さらにそうしたものに包摂しきれないさまざまな感覚があったとされる(正直、この辺の説明が本書の中心命題とどのように結びついているのか、評者にはよく理解できなかった)。しかしそれらは人間関係を支配する貨幣の起源でありながら、それと同時に、どれひとつとって、それ自体が直接に商業社会に結びつくものではない。むしろ暴力と支配によって負債は形成され、それが貨幣という入れ物に結びつく。貨幣(負債の数値化とその決済手段)が市場とともに登場するのは、むしろ古代帝国の侵略地域であった。侵略軍が資源の現地調達のため、トークン貨幣による納税を強い、トークンを貨幣とする市場を創りだしていった。そして近代に入り植民地支配を正当化したものも、植民地地域は「負債」を負っている、という大義であった。現代にいたるまで、金貸しが常にシャイロックのような悪人に描かれる一方で「借りた金は返さねばならぬ」という倫理的命題が再生産され債務の償還に失敗したものが「怠け者」「自己責任」の烙印を推され続ける。これを批判しようとする議論もまた、常にこの負債の「対等な交換」という側面だけを見たま、貨幣は市民の自由に任されるべきか政府の管理におかれるべきかの両者を行き来している。これこそまさに「スミスのユートピア」ということになるのであろう。

著者は本書の最終的な目的は、読者の発想を自由にすることである、という。

我々は特定の観念に縛られている。本書で対象とされているのは「借りたものは返さねばならぬ」という固定観念である。一方で無視され続けながらも我々の生活を常に支えているコミュニズム的契機——その中心にあるのは、著者の独特の言葉で言えば「愛」である——を再興することで、新たな認識基盤を創り出すことができるかもしれない（できるに違いない）。これが著者が本書に込めた最終的な目標であるようだ。

しかしながら、著者も繰り返し述べている通り、この「借りたものは返さねばならぬ」という負債の「対等関係」の虚像をはぎ取った後に現れるのはむき出しのヒエラルキー関係とそれを支える暴力装置であろう。コミュニズム的契機がむき出しのヒエラルキー関係に対してどのような関係をとることができるのか本書からは（一読した限りでは）、得られない。著者も、コミュニズム的關係性を基盤にすることで暴力を伴うヒエラルキー関係を一朝にして解体することなどできると考えているわけではない。生まれながらにして負わされてしまった負債（実存的負債概念のように思いこまされているが、その実、暴力と虚偽によりねつ造された負債）を償還するための労働を拒絶せよ、「働くな」という主張（A.ネグリの想起させる）よりは、むしろ、その打ち破りがたいヒエラルキーを見据えな

がらも「全ての人に職を与えろ」と要求するほうが、そしてその「職」が資本制的な意味での負債を償還するためではなく、今日のヒエラルキーを前提としてその中でその関係を内部から相対化してゆく方向性を選択するほうが（MMTのJGPでは民間部門で雇用されなかった人たちに地域社会が職を与えることが求められるが、そのためにはそこで職を得る人ばかりでなく、多くの地域住民たちが自分たちの地域社会を改善するため、何が必要かを、利潤原則を離れ、自らとらえ返す行動に参加することが求められる）よかったのではないだろうか——その意味で評者は著者よりはMMTの立場に立つものである（たとえ「実存的負債」概念が神話に過ぎないことを認めるとしても）。しかし本書の問題意識は理解しているつもりであるし、多くの人に一読を勧めたい。